

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18H00760

研究課題名（和文）教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存

研究課題名（英文）Utilization and Conservation of Regional Heritage as Resources for Education or Tourism

研究代表者

日高 真吾（HIDAKA, SHINGO）

国立民族学博物館・人類基礎理論研究部・教授

研究者番号：40270772

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、日本列島各地で継承されている地域文化を地域で学ぶための教育資源として活用するためのモデルの構築を目指したものである。また、地域住民が主体となって観光資源として活用するための方法論について考察した。その結果、地域博物館の展示内容をベースとした教育キットの開発をおこなった。また、視覚障害者、聴覚障害者が健常者と同等の展示情報が取得できるための展示ツールの開発をおこない、3つの教育キットの製作と5つの展示キットの開発をおこなった。今後は、これらの教育キットを学校教育で運用していきたいと考えている。また、展示キットは、博物館での本格運用を目指した活動を展開したいと考えている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の契機となった文化財保護法は、これまで文化財の保存を主眼とし、文化財の活用について考えることが前提となっていた。しかし、第5回目の改正では活用を前提として、文化財の保存を考える方向へと大きく展開したことが大きな特徴であるといえる。つまり、文化財の保存と活用の意識のプロセスが逆転したものである。ただし、この意識の転換は、文化継承のプロセスのなかでは大きな変化とはならない。それは、文化の継承を目的とした場合、文化財の保存と活用の両立は、絶対的なプロセスだからである。本研究では、文化財の保存と活用の両立を図る具体的な教育プログラムを製作したことで社会的意義を示した研究となった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research project is to build a model for utilizing the regional cultural heritage inherited in various parts of the Japanese archipelago as an educational resource for learning in the region. In addition, we considered the methodology for local residents to take the initiative in utilizing it as a tourism resource. As a result, in this research project, we developed an educational kit based on the contents exhibited at the regional museum. We also developed an exhibition tool for visually impaired and hearing impaired people to obtain the same exhibition information as healthy people. As a result, we produced 3 educational kits and 5 exhibition kits. In the future, we would like to operate these educational kits in school education. In addition, we would like to develop activities aimed at full-scale operation of the exhibition kit at the museum.

研究分野：保存科学

キーワード：保存科学 地域文化 地域博物館 教育キット 展示ツール ユニバーサル・ミュージアム 文化財 観光

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究課題は、観光資源化の地域文化が注目されている近年の状況において、まずは地域において地域文化を教育資源として活用し、その延長線上に観光資源化を図るプロセスを経なければ、持続可能な地域文化の活用、あるいは観光誘致に伴なう、観光資源化は測れないのではなかという問題意識から、最初のステップとして地域住民のための地域文化を意識させるモデルの構築を目指したものである。

そうしたなか、本研究課題は、2011年の東日本大震災でおこなった文化財レスキュー事業の経験が大きなきっかけとなっている。東日本大震災は、1995年の阪神・淡路大震災以来2度目となる全国規模の支援体制のもとに展開された大規模な文化財レスキューである。発表者は文化財レスキューの対象として最も大きな割合を占めた民俗資料の文化財レスキューを担当し、救出・一時保管、応急措置の活動をおこなった。しかし、文化財レスキュー事業後、救出された文化財群が地域に返却された際、当該地域でこれらの文化財の活用について考える状況にまで復興が追いついていないという課題に直面した。また、民俗資料は所在している地域の文化を表象できる情報を内包しているものの、その情報をどのように地域で活用するのか、どのようにその活用を継続していくのかなどの課題に取り組む研究がまだまだ少ないことに気づいた。

そこで、民俗資料の活用について、まず民俗資料を地域文化財の一つとして位置づけた。そのうえで、地域住民が、自分たちの地域文化に気づくための教育資源としての活用を目指すこととし、国立民族学博物館ですでに運用している教育キット「みんぱっく」を参考にしながら、「地域文化の宝箱」を製作し、実践研究をおこなうこととしたのである。

2. 研究の目的

上記、問題意識を解決の方法論として、本研究課題では、まずは地域博物館あるいは地域振興の活動に即した教育プログラムを作成し、地域の教育資源として活用できる方法論を提示することを目的とした。

3. 研究の方法

研究の対象とした地域において、教育資源としての地域文化の活用の在り方について、まずは博物館関係者と意見交換をおこない、その結果を基に研究対象とした地域のキ・パーソンとなる住民とディスカッションをおこないながら、地域が求める地域文化の発信法補遺、あるいは地域博物館のあるべき姿について意見交換をおこないながら、教育キット、あるいは展示ルーツの開発を進めた。

4. 研究成果

本研究の成果は関連する学会において発表するとともに、論文としても取りまとめた。また、研究フィールドとした地域において、地域住民を対象とした成果公開の場を設けた。特に本研究課題で力点を置いた教育キット「地域文化の宝箱」についてその概要を以下に示す。

「地域文化の宝箱」とは、博物館や資料館で所蔵される民俗資料について、学校等で能動的に学べることを目的に製作した教育キットである。そして、この教育キットには、「博物館・資料館見学の事前学習、事後学習に役立てることができる」、「地域に学びの場を広げることができる」、「主な利用対象は、地域の博物館・資料館の見学をおこなう予定の小学生とする」という3つのコンセプトをたてた。

「地域文化の宝箱」を製作するにあたって対象とした地域文化は、新潟県村上市の「縄文の里・朝日」で展示している「奥三面の山村生産用具」、宮城県気仙沼市旧月立中学校収蔵庫で保管している「カツオを中心とした魚食文化」、大阪府枚方市の「旧田中家鋳物民俗資料館」で展示している「鋳物資料」、京都市左京区久多いきいきセンターで展示している「久多の山村生活用具」のあわせて4つの地域を対象とした。

「地域文化の宝箱」は、地域の博物館施設との連動性を意識し、該当する博物館の展示内容のエッセンスを学校等で能動的に学ぶことを基本的な運用形態としている。そこで、対象とする小学生が能動的に学べるよう、五つの視点から内容を構成した。一つ目は、いろいろな角度から観察し、発見を促すものとして、実際に触れることのできる実物資料や複製品を入れる。二つ目は、五感や体全体を使うことで実感できるものとして、巨大な資料の一部や原寸大のグラフィックを製作し、実際の場所やモノにアクセスするための情報を盛り込む。三つ目は、使用や体験をすることで理解が深まるものとして、資料を構成する素材サンプルを用意する。四つ目は、広い視野・長い時間軸で考えることができるものとして、現在に形を変えて伝えられている資料から、道具としての原理や工夫を分析・探求できる仕掛けづくりをおこなう。そして五つ目は、複数人数で取り組めるものとして、1人から4人の体験を互いに確認しながら学びを深められるコミュニケーションツールを製作することとした。また、授業時間に配慮した適度な内容量、興味を持ってほしいポイントの明確化に留意した。

以上が「地域文化の宝箱」の概要である。あらためてその機能をまとめると、「地域文化の宝箱」とは、いわば、博物館施設の予告編、見どころは博物館にあるということ、コンパクト

な学びも深い学びもできる、先生と生徒と一緒に学びを進められる、利用者がもっと知りたくなる気持ち呼び起こす、もっと知りたくなった意欲にこたえる道筋・方向を示すというものを備えた教育パックということである。

現在、「地域文化の宝箱」の初号機として、新潟県村上市の「縄文の里・朝日」と連動した「奥三面の山に生かされたくらしパック」を製作し、来年度からの本格運用を計画している。そこで今年度は、村上市教育委員会の協力のもと、校長会での概要紹介、夏休み期間中に開催された教員向けワークショップでの展示（写真1）「奥三面」の文化にゆかりのある小川小学校の教員との意見交換会（写真2）をおこなった。いずれの機会でも高い関心が寄せられた。一方、関心を持った教員からは、奥三面の山のくらしがどのようにすごいのかを子どもたちにどう伝えればいいのかという意見がだされた。この点は、これまで学社連携や博学連携がなかなか定着できずにきた大きな要因でもあり、重大な課題と捉えている。そこで、村上市教育委員会や連携博物館である縄文の里・朝日とともに解決策を検討しているところである。その解決策の一つとして、教員から、いわゆる「よそ者」である発表者が、なぜ奥三面の山のくらしの文化について高い関心を寄せたのかについて、子どもたちと近隣の学校教員も含めた授業で伝えて欲しいという要望があげられた。そこで、まずはこの要望に応えることを考えている。またこの点は、研究者が研究対象者に研究成果をどのように還元するのかという課題に対しての先行事例のひとつになる可能性を感じている。

来年度から本格的に運用するにあたって、利用する教員の利便性、子どもたちの反応、管理する縄文の里・朝日の課題等を見出し整理しながら、解決するための体制を構築することとしている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 日高真吾	4. 巻 44-1
2. 論文標題 大阪府北部を震源とする地震で被災した国立民族学博物館の復旧活動	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国立民族学博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 53-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Shingo Hidaka	4. 巻 102
2. 論文標題 Mobile and Non-Chemical Pest Control Measures Applicable to Small-Size Museums	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Senri Ethnological Studies	6. 最初と最後の頁 69-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 日高真吾	4. 巻 1
2. 論文標題 大型博物館の展示場管理	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 展示学事典	6. 最初と最後の頁 334-337
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Naoko Sonoda, Shingo Hidaka, Kaoru Suemori	4. 巻 1
2. 論文標題 Continuous Efforts over 10 Years Storage Re-organization at the National Museum of Ethnology, Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 IIC 2018 Turin Congress - Preventive Conservation: The State of the Art	6. 最初と最後の頁 234-241
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 N. Mori, T. Higo, K. Suemori, H. Suita, and Y. Yasumuro	4. 巻 1
2. 論文標題 Visualization of the Past-to-Recent Changes in Cultural Heritage Based on 3D Digitization	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 7th International Conference, EuroMed 2018, Nicosia, Cyprus, Part I	6. 最初と最後の頁 3-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 日高真吾
2. 発表標題 地域文化の宝箱の展望と課題
3. 学会等名 日本民具学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 日高真吾
2. 発表標題 博物館の事前学習のための教育キット - 地域文化の宝箱
3. 学会等名 国際フォーラム『地域文化を活用する - 地域振興、地域活性に果たす役割』(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 未森薫
2. 発表標題 新潟県十日町市「根津家文書」の解読支援
3. 学会等名 国際フォーラム『地域文化を活用する - 地域振興、地域活性に果たす役割』(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 園田直子、日高真吾、末森 薫、河村友佳子、橋本沙知、西澤昌樹、小関万緒、石田系絵
2. 発表標題 大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の収蔵庫の被害と対応について
3. 学会等名 文化財保存修復学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 日高真吾、園田直子、末森 薫、河村友佳子、橋本沙知、西澤昌樹、小関万緒、石田系絵
2. 発表標題 大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の展示場と図書室の被害と対応について
3. 学会等名 文化財保存修復学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 日高真吾、園田直子、末森薫、橋本沙知、和高智美、河村友佳子
2. 発表標題 米原曳山祭「松翁山」の保存修復事例 - 地域密着型の保存体制の構築を目指して
3. 学会等名 文化財保存修復学会第40回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 N. Sonoda, S. Hidaka, and K. Suemori
2. 発表標題 Continuous Efforts over 10 Years for Storage Re-organization at the National Museum of Ethnology, Japan
3. 学会等名 The International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works (IIC) 2018 Turin Congress; Preventive Conservation: The State of the Art, , Politecnico di Torino, Turin, Italy (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 日高真吾
2. 発表標題 日本における被災文化財の保存と活用について
3. 学会等名 日本・エクアドル外交関係樹立100周年記念国際シンポジウム『文化遺産とは何か：エクアドルと日本の自然災害を通して考える』（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 未森薫	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 354
3. 書名 敦煌莫高窟と千仏図 規則性がつくる宗教空間	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存 https://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/other/kaken/18H00760 教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存（2018-2020） http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/other/kaken/18H00760</p>
--

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	園田 直子 (SONODA NAKO)	国立民族学博物館・人類基礎理論研究部・教授	
	(50236155)	(64401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	未森 薫 (SUEMORI KAORU) (90572511)	国立民族学博物館・人類基礎理論研究部・助教 (64401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 国際フォーラム『地域文化を活用する - 地域振興、地域活性に果たす役割』	開催年 2019年～2019年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------